

内観ニュース

第30号

発行所
日本内観学会〒702-8508
岡山市浦安本町100の2
慈圭病院 ☎086-262-1191

日本内観学会の

新理事長に就任して



巽 信夫

このたび日本内観学会理事長に推挙されました。この紙面をお借りして、一言就任にあたってのご挨拶を述べさせていただきます。私ごとになりますが、縁あって当第一回大会に参加させていただきました際、他学術集会に類をみないその雰囲気につき魅力を感じ、以後本学会員として歩ませていただき、今日にいたっております。

この魅力の源泉は、内観を媒体に、人間が生きているということそのことを共通の関心事とし、諸ジャンル及び多世代の方々が一同に集う、まさにその学際性にあるようです。

さて、本学会設立は、創始者吉本師以後にむけた内観の継承伝達をという、竹元隆洋、三木善彦両先生の熱い発願に由来します。そして、内観の科学的研鑽と普及活動を旨とし、故村瀬孝雄先生を初代会長に迎え、具体化したというのが、その経緯でした。

そして、本年五月、第二十九回大会を迎えるに至ったわけですが、第二代会長、副会長（事務局局長併任）としてご尽力されてきた、竹元、三木両先生が、それぞれに体調をくずされ、共に御辞意を表明されるという異例の事態に見舞われました。しかも、今回は役員改選年度にも重なっております。

組織機能の滞りのため、会員の皆様にご迷惑をかけてはという思いから、常任委員会臨時協議を重ねてまいりました。その結果、今回は過度的措置として、新三役及び事務局局長候補を予め準備し、且つこの機会に時代的変遷に即した会則改正案も同時に提出させていただく方向で、臨ませて頂いた次第です。

幸い会員各位のご了解とご支持をいただいた訳ですが、小生自身については、事の成行き上、お薦めをお断りし難い状況下にあり、非力ながら拝受させていただくことになりました。

さて、ここで本学会の今後の方向性につき、現時点での私なりの見解をしたためさせていただきます。

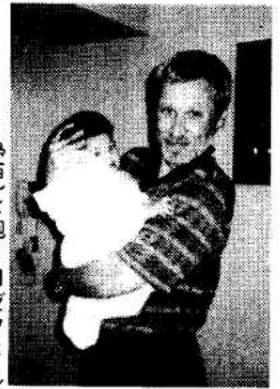
まず、現在、組織としての外的な再編期であるのみならず、内的にも大きな岐路を迎えていると認識いたしております。つまり、これまでの足跡にあつて、とりわけ内観医学会の新設は、自然の流れとはいえず、改めて本会独自の有り様が問われる事態でもありました。幸いその取り組みに向けての姿勢は、この数年来の学会のメインテーマや、シンポジウムにも自ずと反映されてきました。つまり、既存の医学モデルを主軸にした傾向から、内観の原点にたちかえつての学際的なアプローチへとパラダイムシフトしつつあります。

小生自身も、メンタルヘルス活動への取り組みを通じ、全人的、全生涯発達の観点の必要性を痛感しているだけに、内観本来の貢献の意義に思いを新たにさせていただいております。

次に、次世代の方々への継承も、大切な課題です。そのためには、内観の本質を十分踏まえつつも、時代感覚に即した展開を通じ、裾野を広げて行くことの必要性をおもっています。と同時に、今大会での「面接者資格シンポジウム」の際、話題の中心となった、面接者の役割についての検討も、資格以前のテーマとして、改めて問われ出しているようです。従来この件につき、時にとりあげられることはあつても、問題意識のもとに検証するという取り組みに乏しかったくらいがあります。

しかし、内観者の自発性をあくまで尊重し、絶対傾聴を旨とするそのシンプルな構造のなかに、心理面接のエッセンスが濃縮されていることも事実です。とりわけ時代意識の変遷に伴う内観者の心的特性をふまえ、臨機応変な対応を余儀なくされる昨今、このテーマを再照射し、共有してゆくことは、今後の内観普及のうえで不可欠のようです。

最後に、世界的に東洋の知恵、とりわけ日本文化への関心が高まりつつある昨今、具体的実践と理論的根拠の解明に取り組んできた当会への注目と期待は、今後一層高まってくると思われまします。いざれにしろ、内観活動の節目時をむかえ、会員の皆様と新たな展開に向け共に歩ませていただければと念じつつ、結びとさせていただきます。



愛児を抱くヨゼフさん

ヨゼフ・ハルテルさん を偲んで

山田 真弓

たまたま休みで自宅におり、くつろいでいた夕方、受信を知らずランプが点いたのが目に留まり、ベルが鳴るよりも早く受話器を取った。「ハロー！ 真弓？」聞きなれたヘルガさんの声か耳にがながん響いた。まるで隣家からかけてきたようにはっきりと聞こえたので、「ヘルガさんね。日本にいるの？」と聞くと、彼女はまるで山のふもとから頂上に向かって叫ぶように「聞こえている？」と更に大きな声で叫んできた。

私も負けずに大声で返事をすると、いきなり本題に入り、「ヨゼフ イスト ゲシュトルベン！(ヨゼフが亡くなった)」と伝えてきた。何か心がスツと冷静になり、私も「ヤー(はい)」とだけ答えた。ドイツ語でお悔やみの言葉をどういふかはすぐに頭に浮かんできたが、何も言わなかった。ヘルガさんもフツと冷静になり、「この内容を石井先生、宇佐美和尚そして内観の皆様方に更に伝えてほしい」と、予め書いてあるものを読み上げるように一気に言った。私は「直ちに伝えます」という短い言葉で返答した後、沈黙が流れた。電話口でヘルガさんが泣き出した。私はただ受話器を握り締めていた。頭の中を様々な言葉が駆け巡ってはいたが、あえて何も言わなかった。まるで時間が止まったかのような間の後で、ふと電話をしていたことを思い出したように「ダンケ！(ありがとう)」とひと言だけ告げられた。わたしも「ありがとう」と短く言った後で、「すぐに伝えます」と答えて受話器を置いた。

振り返ると、神妙な面持ちをした幼い娘が私を見つめていた。「ヨゼフさんが死んじゃったんだって」と彼女に言うのと、「え？」だってヨゼフさん、さつきからあそこにいるよ」と窓の外の木々を指差した。「ほら、あの葉っぱと葉っぱの間

にいるでしょ？」と更に言う。目を凝らしてみたが、葉に風がそよいでいるばかりで、何も見えなかった。すると、「ヨゼフさん、あのかわいい女の子と一緒だったの？」と更に聞いてきた。頭の中がますます疑問符でいっぱいになってきたが、とりあえずまず疑問符でいっぱいになった。石井先生に連絡が取れるのなら、真つ先に伝えてはいるはずで、私にかけてくることは無いだろう。きつと多忙な石井先生には電話が今つながらなかったのだろう、と判断したのだ。

余談だが、娘と共にオーストリアへ行つてヨゼフさんの死を悼むセレモニーに参加した際に、「あの可愛い女の子」とは、ヘルガさんの事を指す、という事が娘の話からわかった。私はてっきり別の人とはかり思っていたので意外に思い、ヘルガさんに伝えると「どうして違うと思ったの？」と逆に問い返されてしまった。そういえば、常々ヨゼフさんはもう一度ヘルガさんと仏式の結婚式を盛大に挙げたい、と言っていた。本当に仲の良い夫婦だった。友人宅で突然心臓発作に因り亡くなつてしまったヨゼフさんの訃報を聞いた時のヘルガさんの胸中は想像を絶するものだったに違いない。さて、早速和尚様に電話をすると、「わかりました。大変だったねえ。ありがとう」と、何も聞かず優しい言葉をかけてくださった。その後で石井先生の自宅と携帯電話にメッセージを録音し、念の為メールも書いていると、段々本当にヨゼフさんはこの世にいないのだろうか？ 私は嘘を言いふらしているのではないかと不安になってきた。実感が全くわいてこなかったのだ。

もう一度、まだ耳に鮮明に残っているヘルガさんの言葉をじっくりと思い出してみた。そのドイツ語の単語から、事故死でも殺された訳でもない事がわかり、何となくホッとした。ヨゼフさんの人生は常々映画のようだ、と思っていたのだが、終幕も本当にドラマのようだった。講演でもよく彼は「今はこの体を借りてこの世で演技をしているだけだ」と自らの人生をまるで人事のように客観的に話していたものだった。もう一度ヨゼフさんやヘルガさんに逢いたいと思つていた折、和尚様がすぐにでも渡欧なさる、という話を聞いた。そこで職場と主人に相談をして、急遽私も娘と共に随行することにした。

十二月初旬の寒い日だった。お葬式はキリスト教に基づき

既に執り行われていた。突然の事でヘルガさんはあわてて遺影にする写真を探したが、常に大勢の友人に囲まれていて、一枚として一人で写っている写真が見つからなかった、という。結局専光坊で修行をしている時の素晴らしい写真が日本から送られ、それを使用した、と聞いた。

お弔い会（来迎式）の前日、和尚様とヘルガさんや内気道協会の人々と共に祭壇を作り、セレモニーの準備をした。真っ白な円柱型の簡素な骨壺を日本から持参した美しい容器に入れる際に、ヨゼフさんの骨を見たのだが、それは殆ど灰と言っても良いほどにもろく粉々になってしまっていた。死の直前まで睡眠時間も惜しんで、通常の人間の3倍以上も働いていたヨゼフさんは、きつと身体中ポロポロになるほど疲れていたのだろう、と思った。

来迎式は二〇〇五年十二月八日に内気道協会の研修所で執り行われた。丁度その日はヨゼフさんがそこで内観者と修行をする日だったそうで、急遽その日に決定したにもかかわらず、ホールを埋め尽くし、立っている方々や会場に入りきれないほどの大勢の弔問客が押しかけた。

まず始めに全員で「南無阿弥陀仏」を唱えている中を、正装した和尚様が厳かに祭壇に向かって進んでいった。そして静かにクッションの上に腰を下ろすと、皆の方に向かって「初めてヨゼフさんの訃報を聞いた時のこと」からお話を進めてくださった。その温かな、心に染み入る声を聞きながら、ふと目を上げると、遺影の中のヨゼフさんがいつもと同じまなざしで皆を見守っているのが見えた。道場は畳敷きなので、皆正座をして一心に和尚様の話に耳を傾けていた。線香の煙と香り、木魚の音など、ここがウィーンである事を忘れさせてしまうような印象だった。

しかし弔問客にとってはこのセレモニーは、それほど異国のものとは取られておらず、いつもの修行の続きのようだった。お経も既にローマ字になっているものが一人ずつの手元になり、暗唱している人達もいた。皆で「生きて身を」という歌を日本語で斉唱したのだが、それも毎回歌っているように、皆楽譜を見ながらローマ字の歌詞を日本語で歌っていた。私はピアノで伴奏をした。メロディーだけなのでカラオケのテープには迫力が足りなかったのだが、手作りの心のこもった音楽になったのでは？ と自己満足をしていた。

しかし頭の上の方から「エゴ！」というヨゼフさんの声が聞こえたような気がした。純粹に親しみのある儀式の雰囲気にした、と伴奏をしたつもりだったが、皆の前で注目を浴びたいという気持ちは無かったのか、と心の奥底をヨゼフさんに見られてしまったような気がした。

それから弔問客全員が二箇所に置かれた焼香台に並び、皆で「南無阿弥陀仏」を唱えながら、一人ずつ焼香をしていった。前の人との間隔を詰めて並ぶように言われたが、本当に大勢の人々が並んでいた為には、全員が終わるまでに長い時間がかかった。その中にはフランツ・リッターさんや多くの内観関係者の姿が見受けられたが、そこにはヨゼフさんの二人の息子さんの姿は無かった。ヘルガさんによると、まだ十代の子供達にとつて、父親が亡くなった事だけでもショックなのに、その後でお葬式や追悼式が続き、何度も「父親が死んだ」と言われる事には耐えられなかったのだそう。特に弟の方は暗い部屋でぼんやりと空を見つめている事が多いのだ、という。

来迎式の最後に、和尚様が全員に行き渡るように、蓮の花びらを部屋中に降らせていった。その場に居合わせた方達の感想文を後から読ませて頂いたのだが、殆どの方がその瞬間を、最も心に残った印象深い情景だ、と書いていた。まるで木の葉が舞うように花びらが地面に落ちて土となり、やがて葉となり養分を作り出す、といった自然の輪のようなものを感じた、という記述もあった。和尚様はあえて、その花びらが何の意味を持つのかについて殆ど説明をなされなかったが、私も多くの方と同様、その花びらを靴の中に入れていつも持ち歩いている。

時の流れは本当に早いもので、あれからもう半年以上もの月日が経とうとしている。その間何度かヘルガさんや息子さん達と電話で話す機会があった。当初は悲しみや不安を告げる事が多かった内容が、次第に週末に内観者が大勢来る事になっっている、といった前向きな内容に変わっていった。

何よりも残された御家族の方々が健康で、幸せに過ごされることを切に願っている。そして内気道協会が未来に向けて梶をしっかりと取り、順風満帆に更に進んで行けるよう、私に出来る事があれば何でも協力したい、と思っている。最後にヨゼフさんの御冥福を心からお祈り申し上げます。

〔ワークシヨップ印象記〕 第十七回内観療法ワークシヨップに参加して

島根県教育委員会 スクールカウンセラー 美川 寛

今回の内観療法ワークシヨップへの参加は、風邪を押しての参加でしたが、島根からはるばる静岡県掛川市まで来てとても良かったと思えました。

このワークシヨップの参加人数は百名足らずだったと思いますが、懐かしい人との再会や新しい人との出会いがあったり和気藹々とした集いであり、プログラムの内容はもちろんのこと大変に良い研修会でした。懇親会にいたっては約三十名の少人数であり、内観のオーソリテイと身近でお話を聞ける良い機会でもありました。

さて二日間のプログラム内容を点描的ですが、私の感想を含めて記させていただきます。初日の三木善彦先生の講演は、いつもそうですが手品を交えた楽しい話で、また事例もあげられ、わかりやすい内観の基礎的かつ実際のな内容でした。「あなたは今のままでいいのよ」と言ってくれた母親の深い愛情に気づいたある女子学生の事例を聞いて涙する参加者もおられました。もつと多くの人に聴いてもらいたい話でした。

「スポーツと内観」という松田泉・千枝夫妻の話もすばらしいものでした。現役のマラソンランナーの松田千枝氏は、米子内観研修所の木村先生に指導を受けられたようですが、内観してから「何が何でも相手に勝つということではなく、自分が心地よくトレーニングし笑顔で走りたい」と言う気持ちになりました。また、お子さんも小五年時に内観を経験されて、思いやりのあるとてもいい子どもさんに育ったと話されました。(*)

シンポジウムは、竹元会長が体調を崩されたということと急遽、本山陽一先生が座長を勤められました。「内観の多様性を探る」と題して、医療、教育、福祉、企業等の関係者がシンポジストとなり、それぞれが二十分ばかりの話をしました。私も福祉関係者として、児童福祉施設や児相での経験と今後の子どもたちへの指導のあり方について拙い話をさせていただきました。私は二〇〇五年四月からスクールカウンセラーの仕事をしています。相談を受けた子どもさんの中で、

内観の適応のありそうな生徒にノート内観等を勧めますがうまくいかないこともあり、やはり「最初は集中内観からはじめるのが一番だ」と考えていました。ところがその集中内観をしてもらうのがより難しくなりました。今回の参加者の話の中で「ノート内観は情動への侵襲性がなくて安全である」という意見もあつたり、また池新田高校の飯野哲朗先生からエンカウンターエクササイズで内観の具体的方法を提示していただいたり、非常に参考になりました。本山陽一先生が「日常内観は知的なもの、集中内観は情動的なものに伴う、全く別なものと考えた方がいい。」と言われ「日常内観やノート内観では、深いものを求めなくても良いのか」と自分なりに納得した次第でした。

懇親会は、先に述べたように少人数でしたが、三木先生の手品、皆さんと楽しい会話、たくさんのお酒など、大満足で有意義なひと時でした。その後の二十一時から二十三時までのナイトセッションは風邪を引いていた上にアルコールが加わったせいかわかりませんが咳が酷くなり、かなりつらい2時間でした。私は、内観研修コースに割り当てられ実習者(当夜は七名)への面接係でしたが、咳がひどくて途中リタイヤしてしまいました。面接を一手に引き受けてくださった長島正博先生と米子の松嶋先生に迷惑をかけてしまったことを反省しております。久しぶりに長島先生にお会いしたので、この際日ごろ内観面接について疑問に思っていることについて質問してみました。私は虐待を受けた子どもや心に傷を持っている子どもたちに面接するときには、できるだけ寄り添いながら支持的な面接方法をとるのが普通です。しかし内観面接では父性的な面接をされる場面にも遭遇したこともありすがどうですか、と尋ねると長島先生は「人に応じて対応を変えます。内観の目的は何かをわかっているならば、自ずとどのような面接をしたら良いかわかります」ときっぱりと言われました。私は愚問をしてしまったなと思つたと同時に、私にとつてこのことは大きな課題だと思われされました。面接については、先輩の先生たちが色々と文献に書いておられますが、実際は何年やっても難しいものであり、死ぬまで勉強かなと私は思っています。

二日目の最初の講演は長島正博先生の「吉本伊信先生の思い出」を貴重なスライド写真など使つて話してくださいまし

た。吉本先生の身近で寝食を共にされた人でないとわからないことを聞かせていただきました。尊敬する吉本先生の話は何度聞いても心が動かされます。変な喩えかもしれませんが、イエスの一番弟子のペテロから話を聞いているような錯覚さえ覚えました。

次に体験発表は二名の男女の方が御自分の経験を話してくださいました。体験発表はやはりどなたの話も聞いても感動します。私たちのためによく話してくださいと頭が下がる思いがしました。

ワークショップの最後は、巽信夫先生の「働きざかりのメタルヘルスとしての内観」と題して「中年の危機」をキーワードでアカデミックな講演でした。内観の有効性については話されましたが、私の頭に断片的に残っている印象的な言葉は「無条件に愛されている真実への気づき」「根源的な罪性の事実への気づき」「内観面接は、複眼的な視座が求められる」等ですが、時間が少なうともっとじっくり聞きたいと思いました。

今回のワークショップの会場は、「ヤマハリゾートつま恋」という五十五万坪の広大な敷地に広がる自然の中の一隅にあります。会終了後は少し時間があつたので、森林乃湯（温泉）の露天風呂に入ることができました。晩秋の森林を眺めながらゆったりとできて、心身ともリラックスさせられました。そして田代修司大会長はじめ準備をしてくださった方々に感謝しながら帰路に着きました。

このような研修会の印象記は、もっと詳しく正確に書くべきでしょうが、私の記憶の中にあることを極めて主観的に記述してしまいました。皆様にお許しを願って、筆を置きたいと思えます。

(*) 詳しくは、鶴田京子さんのホームページ

<http://topcoach.cocolog-inc.com/top/2005/10/index.html>
の十月二十九日の記載部分を参照してください。

【学会印象記】

第二十九回日本内観学会に参加して

東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース 高橋 美保

筆者は、五年程前に縁あって内観と出逢って以来、内観が心の何処かに引っかかっている。引っかかっているというはある意味宙ぶらりんなわけで、正直あまり気持ちの良い状態ではない。しかし、それをあるがままに任せておいたところ、今回日本内観学会で発表する機会をいただくことができ

た。集中内観体験以降、内観には心理療法のエッセンスが芳醇に詰まっているように感じられており、その理論化をしてみたいという気持ちがあつた。というのは、内観はたぐいまれな臨床的効果をあげているにもかかわらず、一方で宗教や矯正のイメージも強く、一般の人からは何処か「うさんくささ」を覚えられることがあることをもったくないことと感じていたのであつた。内観を誤解なくより多くの人に役立ててもらうには、その実効性とイメージをつなぐものとしての、理論や説明が必要ではないかと考えたのである。今回、そうして考えていた理論化の一部を発表する機会を得ることができた。本稿では、このような筆者が学会に参加して抱いた雑感を述べたいと思う。

まず、シンポジウム「教育に生きる内観」を拝見して、先生方が各々の教育現場で創意工夫をされながら内観を導入されていることに大いに感服した。内観を広く生かしていくには、このような現場での実践の積み重ねこそが、非常に重要であることを感じた。と同時に、現場に適用する際には、やはり内観のエッセンスを十分に理解した上で現場に合わせていく必要があると感じた。理論化はそのためにも必要である。ただし、理論化は理論によって出来るのではなく、実践を通して実現する。したがって、理論化と実践はまさに両輪として機能しなくてはならない。今回の学会における多彩な発表内容を見て、学会が理論と実践の交流の場となっていることを改めて痛感した。

また、シンポジウムを通して、日本では内観の精神はどうか慎ましくも、子どもたちの心の中にしっかりと根付いていく

のだという地道な印象を持った。ところが、続いて上映されたドイツの内観二十年のビデオを見て驚いた。一つには、ドイツでは内観がかくも着実に社会の中で活用されていることを改めて知ったこと、もう一つは、それを素晴らしいビデオに仕立てて見事にアピールしていることに驚いたのであった。私は吉本先生と直接面識はない。このような吉本先生を知らない世代の人間は、内観を通してしか吉本先生の内観を感じられない。したがって、内観を知るには内観をすることが一番の近道なのだろう。しかし、内観を知らない人にはどのように内観を提示していけばいいのか。まじめに地道に内観を実践する一方で、内観普及に尽力されたという吉本先生の商才もまた、うまく引き継いでいく必要があるように感じた。

なお、今回の学会ではオーストリアで内観研修所の所長を勤められ、昨年逝去されたヨゼフ・ハルテルさんを偲ぶ会にも参加することができた。丁度二年前、初めて日本内観学会に参加した筆者は、集中内観を終えたばかりというハルテルさんの話を聴き、いたく感銘を受けた。今回、偲ぶ会に参加できたことそのものが、何よりも内観的な体験となった。吉本先生やハルテルさんにお返ししていくべきことは、まだまだ沢山あるのだろうと、また新たな引っかけかりを覚えつつ、会場を後にした。

学会大会・ワークショップの案内

第三十一回日本内観学会大会は平成二十年五月に
沖縄県にて開催予定。

第十九回内観療法ワークショップは、平成十九年
十月六日・七日の両日に奈良県にて開催予定。

内観療法を実施した境界性人格障害の症例

陳俊 徐鶴定 方貽儒 王祖承

内観療法(Naikān Therapy)は日本で始めた東方心理治療法として、吉本伊信(一九一六—一九八八)により創立され、自己観察法とも呼ばれる。この療法は自分の過去においての基本的な人間関係についての検証をとおして徹底的な洞察を通じて自己本位的な意識を変え、心理療法である。常識で言うと、「江山は変わりやすくても、本来の性格は変わりにくい」だから、人格障害の治療は長期にわたる治り難い病気である。本文では内観療法を用いて治った境界性人格障害のケースについて考察したい。

症例 男性、二十四歳、未婚。患者が六歳の時、親が離婚してそれぞれの家庭を作った。それ以後、患者は実の母と父の家庭を転々としながら暮らした。患者は小さいときから父親との遊びを喜んで、父親みたいな自由自在の生活に憧れた。確かに母親のような平凡な暮らしは望まず日常生活の中の母親の拘束を嫌った。患者は大学を卒業してからずっと浪人暮らしを続けたが、短期間のアルバイトをしたこともあった。その時、患者はギターを弾くことに憧れて地下鉄でギター演奏のアルバイトを始めた。毎日儲かるお金は少いけれども患者は毎日を楽しめた。

ところが、綺麗な女性に会うと思わず話し掛けるという悪い癖があった。そして、無理やりに交際を強要するとか携帯電話の番号を知りたがった。酷い時はセックスにまで誘うことがあった。患者自身、このような行為はよくないことだと知りながら止めることはできなかった。患者はこれについて「自分は自由な生活が好きで、人と人の間には元々隠し事は必要ないし、お互いに本音で付き合う生活が望みだ。仮に百人の中に一人だけでもそんな自分を理解してくれたら満足だ」と述べている。

治療経過…入院後のMMPIの検査によると患者はFの量表の得点が著しく高く(T分が六十六以上)、Kの量表の得点はより低く(T分は三—五十五)、Hsの量表の得点が著しく高い(T分が六十以上)。D量表の得点は高めであり(T分は六十一—六十五)、Hyの量表の得点も高かった(T分六十以上)。

さらに、Pdの量表の得点が高めであり（T分は六十以上）、Mfの量表の得点も高い（T分は六十以上）。Paの量表の得点は高く（Tは六十以上）、Ptも高い量表の得点を示した（T分は六十以上）。Scも量表の得点が著しく高かった（T分は七十以上）。この患者は境界性人格障害と診断され、丙戊酸ナトリウム（情緒安定剤）の薬を処方された。入院して一週間経ってから内観治療を始めた。治療方法は毎日四時間で、午前、午後二時間ずつ、十日間行った。治療場所は病棟内のワンルームで広さ六平方メートルで、部屋の中には椅子が一つだけ置いてあるだけだった。内観の対象は両親からはじめて、義理の親および恋人に対して調べている。その際に、内観治療の原則に基づいて、三つの項目について調べてもらった。

1、相手からしてもらったこと。2、相手に自分がしてあげたこと。3、相手に迷惑を掛けたこと。
内観治療者は一時間毎に患者の所に行って三〜五分間面接をおこなった。面接の中では、主に内観の進み具合をチェックし、それがうまくいっていれば、次のテーマを与えた。

結果…十日間の入院内観治療を通じて、患者の症状は明らかに軽減していった。内観後は、女性をナンパして、携帯電話の番号を聞き出すこともしなくなった。自分自身の性衝動についても反省している。患者の親に対する見方も変わっている。幼い時、両親は離婚したけど、両親とも自分を愛してくれていたことを内観によって気づかされた。患者は「定職に就いて、人並みの生活をしなければならぬ」と述べている。同時に、「自分を生んでくれた両親とこれまで自分を育て、支えてくれた人々に恩返しをすべきだ」とまで言うようになった。「今後、ギターは自分の趣味として楽しむことにして、それで金を稼ぐことよりも、ギターを通して人と仲良くなりたい」と述べている。

結論…境界性人格障害の患者は、人間関係において、衝動的に振る舞ってしまうことが特徴とされている。自己イメージも不安定で、すぐく揺れることがある。そのため、衝動的な行動が著しい。

われわれの患者も同様であった。彼は、常に極端な努力家であり、その背後には、他者から見捨てられることへの不安が潜在していた。その不安から逃れるために必要以上に異性を求めていたようだ。彼は、幼い頃の両親の離婚によって、見捨てら

れたという心の傷を負っている。両親はそれぞれ新しい家庭を築いており、なおさらその気持ちを増大させていったようである。この幼年の特別な経歴が患者に特有の人格を付与したように思われた。内観治療によって、患者は小さい時、父親と遊んだことや、母親が自分のことを熱心に世話してくれたことを想起している。そして、彼は自分自身のこれまでの行為を振り返ったとき、女性への執着は家族、とりわけ両親の愛を求めため代理行為だったことを洞察している。さらに、患者はこれまでの自分中心のわがままな行為が人に迷惑を掛けてきたことに気が付いて、これからは生き方を変えてゆくことを決心している。

つまり、このケースは内観療法を通して自身の足りない処を反省することによって、境界性人格障害を克服している。

作者単位…2000030 上海市精神卫生中心、上海交通大学医学院精神医学教研室（陈俊 硕、博 连 读 研 究 生。e-mail: doctorcj@sohu.com）

通信作者…王祖承、上海市精神卫生中心、上海交通大学医学院精神医学教研室

（訳・南達元）

新事務局長に堀井茂男氏が就任、
学会事務局が慈圭病院に移転。

日本内観学会事務局（堀井茂男・宗晶子）
 〒七〇二一八五〇八 岡山市浦安本町一〇〇一

慈圭病院

TEL〇八六一二六二一一一九一（呼出）

FAX〇八六一二六二一一四四四八

メールアドレス naikan@zikei.or.jp

第十八回内観療法ワークショップへの誘い

第十八回内観療法ワークショップ実行委員長 吉本博昭

日程…平成十八年十一月十一日(土)～十二日(日)
会場…富山国際会議場
テーマ…「生きるちからと癒されること」
申込み…北陸内観研修所(TEL 〇七六一四八三一〇七一五)
Email info@e-naikan.jp)

今回、「第十八回内観療法ワークショップ」が十二年ぶりに富山で開催されます。現代の日本は、不登校や子どもをめぐる痛ましい事件、ニートの増加、中高年の自殺など、私たちを悩ませています。今回のワークショップを通して、参加者に「生きるちからと癒されること」が生み出され、難問に光明が見えることを願っています。

第一日目は、石井光先生の基調講演「幸せの宝探し『内観のすずめ』」から開始されます。続いて、分科会は、参加者に「学校現場で内観を生かす」、「介護と内観」、「無気力からの再出発」、「暮らしの中の内観」からどれかを選んでいただき、討論の輪に入っていただきます。昨年の自己発見祭りに参加した方は、「これ、ほとんど同じ内容の分科会では？」と気づかれるでしょう。そうです。好評でしたが十分に語り尽くせなかったという意見を反映した結果です。引き続き開催できる特権を利用していただきました。

第二日目は、恒例の体験発表を高畑晃さんと高橋容子さんにしていただきます。最後は、村瀬嘉代子先生の特別講演「子ども時代とこの糧『潜在可能性に気付く』」で子ども本来の持つ豊かさや個性について取り上げられるでしょう。

童話「ハチドリ」のひとしずく、いま、私にできること」のよう

第三十回日本内観学会に富山のお知らせ

第三十回日本内観学会大会長 吉本博昭

日程…平成十九年六月八日(金)～十日(日)
会場…富山市民プラザ
テーマ…「時代が求める内観」
申込み…北陸内観研修所(TEL 〇七六一四八三一〇七一五)
Email info@e-naikan.jp)

富山の地において、第十二回、第二十三回、そして第三十回の本大会開催を行うことになりました。振り返りますと、第十二回は吉本伊信氏の逝去直後に開催され、第二十三回は柳田鶴声、吉本キヌ子氏が亡くなられ、第二世代から第二世代に引き継がれた直後の大会でした。今回は竹元隆洋大会長、三木善彦事務局長がそれぞれの役から降りられ、第三世代にバトンタッチされた最初の大会となりました。富山大会は、学会の節目に遭遇するような気がし、その責任の重大さを痛感している次第です。

準備委員会では、第十八回内観療法ワークショップの準備とともに本大会に向けて取り組み、その中で「時代が求める内観」を総合テーマにしました。混迷する現代日本において内観が今まさに求められているという確信とともに、内観学会が新ジェネレーションにその舵を委ねた時、このテーマが当を得ていると考えるからです。

プログラムは、第一日目が「面接者の条件」として四名のシンポジストによるシンポジウムを、二日目が研究発表に続いて、シンポジウム「時代が求める内観」を、次いで草野亮氏の特別講演を企画しています。第三日目が、研究発表後、三木善彦氏の内観事始めに引き続き内観体験発表、そして最後が神渡良平氏による特別講演で会を終える予定です。

是非、富山まで足をお運びいただき、内観の息吹に触れていただけたら幸いです。

広報編集委員

石井 光 (青山学院大学)
木村 秀子 (米子内観研修所)
真栄城 輝明 (大和内観研修所)

原稿の送り先

〒639-1133 奈良県大和郡山市高田口町九二二 大和内観研修所
TEL (〇七四三) 五二二五七九 FAX (〇七四三) 五四一三三七六
E-mail naikan3@nifty.com